

〔研究ノート〕

リセ・コンドルセの教師たち：
プルーストの時代のフランス古典中等教育の一側面
(後編¹)

横 山 裕 人

教師陣のプロフィール (承前)

レトリック級の教師

1881～1889 年の間、レトリック級では、アドレール (#1-6)、ゴシェ (#1-3)、レオーム (#1-2)、タルボ (#1-1) に代わって、新たにベルナージュ (#1-8)、テリエ (#1-7)、ドフィネ (#2-6)、モソ (#2-2) が着任し、常に 6 人態勢を保った。パリのリセのレトリック級の慣習に従い、プルーストは、キュシュヴァル (#1-5) からラテン語を、ゴシェ (#1-3) からギリシア語とフランス語を教わった。

レオーム、テリエ

パリ生まれのウジェーヌ・レオーム (#1-2)²は、高等師範修了後、あいっいでマルセイユ、ボルドー、サン＝ブリユール³、アングレームのリセで

1 前編は『成蹊法学』88 (2018.6), p. 307-340 (横組). なお、後編刊行までの間に行った追加調査で、前編刊行時点で不明だった点をいくつか解明できた。後編のなかで随時言及することとする。文献の略号等は、前編をご覧いただきたい。

2 *Léonore* LH/2276/65 (#3 RS, #5 EC).

3 在職中の反体制的態度については、下記を見よ。Gerbod (Paul).- *La Condition universitaire en France au XIXe siècle*.- Paris : Presses universitaires de

教えた。1855年10月にパリに戻り、ルイ＝ル＝グラン、シャルルマーニュ、アンリ・カトル、コンドルセ（1859-1874）に勤め、アンリ・カトルに戻りレトリック級教授となった（1874.1-10）。その後コンドルセ校に戻り、1886/1887年度休職（1887年8月22日の引退）までレトリック級を教えた⁴。

レオームは、『16世紀のフランス散文作家』（1869年）、『アグリッパ・ドビニエの歴史的文学的研究』（1883年）といった著作や、ルメール社版ドビニエ全集全6巻の編纂など、16世紀フランス文学研究に寄与した。教科書版では、古典中等教育1874年カリで初めて組み込まれた16世紀フランスの著作家を対象にした撰文集（F56）、モンテーニュの抜粋（F05）を刊行している。

レオームの後任レオン・テリエ（#1-7）⁵は、1860年高等師範学校修了とともに文学アグレガシオンに合格し、ほぼ順調に地方のリセからパリのリセへと移っている。ロラン校教授を勤めていた時、1886/1887年度新学期から休職したレオームに代わって、コンドルセ校のレトリック級を担当することになり、レオームの引退で、正式にレトリック級教授となっている⁶。著作は、褒賞授与式演説の類しか残していない。

タルボ、アドレール、ベルナーージュ

タルボ（#1-1）⁷は、コンドルセ校の出身である⁸。高等師範学校には入らず（入れず？）、パリにあるプティ寄宿学校で自習監督を長く務めた（1834-1845）。1845年アグレガシオンに合格し、「黒服」の境遇から脱す

France, 1965- (Publications de la Faculté des lettres et sciences humaines de Paris. Série« Recherches»; 26), p. 345.

4 *BAMIP*, t. 40, no. 721, p. 616; no. 733 suppl., p. 1293; t. 42, no. 767, p. 438. *AssENS*, 1888に追悼記事（未見）があるので、引退後しばらくで死去したと考えられる。

5 Ch, 1889.12.31. *Léonore* LH/2578/17 (#4 EC, #9-10 RS (1890.1.29)), DF3, p. 172#513

6 *BAMIP*, t. 40, p. no. 721, p. 616; t. 41, no. 735, p. 72; t. 42, no. 767, p. 438.

7 アンジェ出身で司法官を務めた同姓同名の人物（1808.8.12-1860.12.29. LH/2564/86）と区別せよ。BnFのカタログでも混同が起きている。

8 Ch, 1862.8.13; Off. 1882.7.13. *Léonore* LH/2564/87 (#8 RS). 戸籍抄本は含まれていなかった。DF3, 149#361, #451.

ることができた⁹。最初、ナントのリセで第 3 年級の教授となった。1853 年の異動でパリへ転じ、シャルマーニュ校、アンリ・カトル校の勤務を経て、1855 年 1 月からルイ＝ル＝グラン校で教える。1859 年までここで第 2 年級、レトリック級で教えた後、ロラン校を経て、1868 年 8 月 14 日付でコンドルセ校に移ってきた。その後 20 年間母校で教鞭をとり、1888 年 8 月 4 日引退した（後任はモソ）¹⁰。この間、パリ大学区評議会委員も務めた。

タルボは多作で、ブラン社から刊行された『[新] 仏希辞典』『新希仏辞典』は死後も重版されている。ルメール社からは古典文学の文学史を刊行している。また、フォルトゥール改革でフランス語作文練習がレトリック級よりも下位の学年に拡がったのを受け、第 3 年級用と第 2 年級用の簡便な作文教科書を出版している。講読用の教科書版では、中世～16 世紀フランス語関係 (F02, F05, F56) とギリシア語著作家 (G03, G04, G06, G21, G22, G24, G39, G40, G45, G47, G52, G62, G63) に分かれる。

アドレール (#1-6)¹¹にも触れておこう。高等師範学校修了後、ラ・ロシュ＝シュル＝ヨン (ナポレオン＝ヴァンデー) のリセのレトリック級担当講師となり¹²、3 年後アグレガシオンを取得すると正教授に昇格した。すぐブザンソンのリセのレトリック級に移り、1 年後に今度はメッスのリセのレトリック級へと異動になる。1864 年 9 月 10 日にはヴェルサイユのリセのレトリック級教授、1868 年 8 月 14 日シャルマーニュ校のレトリック級教授となり、在職中に受勲している。コンドルセ校への異動の年代ははっきりしないが、1881 年版の職員録ではすでにコンドルセ校在職が確認できる。しかし、1886 年 7 月 2 日現職のまま死去した。教科書類は少ないが、『ブリタニキウス』(F35)がある。

アドレールの後任サロモン・ベルナージュ (#1-8)¹³は、高等師範修了

9 この時代の「黒服の悲惨」については、鹿島茂『職業別パリ風俗』白水社、1999. 第 8 章に詳しい。

10 *BAMIP*, t. 44, no. 816, p. 253.

11 Ch, 1876.2.9. *Léonore* LH/8/21 (#6 EC, #7 RS (1876.2.24)).

12 この時期、まったく同名 (Jean Baptiste Adolphe) の息子 (1855.11.17-1923.12.27. AgGr1881) が生まれている。シャプタル校の文学教授を経て、『ル・タン』紙編集に携わり、小説や劇作を残している (Ch; Off. *Léonore* LH/8/22)。

13 *Léonore* LH/193/61 (#5 EC).

後、すぐにアグレガシオン合格、シャンペリーのリセのレトリック級教授として赴任（その1年後からは同地の理科大学校の文学教授も兼任）、1867年クレルモン＝フェランのリセ、1868年にはパリに転任し、シャルルマーニュ、コンドルセを経て、1879年ルイ＝ル＝グランのレトリック級教授に着任、その後、1886年8月5日コンドルセに再び戻った¹⁴。

ベルナージュは1880年に文学博士号を取得している（『ロベール・ガルニエ研究』とラテン語論文『抒情詩人ステーシコロスについて』）。これ以外の業績は、主に教科書版の刊行となる。ギリシア語著作家では、ハリカルナッソスのディオニューシオスの『アンマイオス宛第1書簡』（G38）、ブルータルコス『デーモステネース伝』（G46）と『ペリクレース伝』（G50）がある。フランス語著作家では、フェヌロン『テレマックの冒険』教科書版を出している（1881年にまず古典中等教育用（502頁）（F42）、1882年には専門中等教育・高等初等教育用（468頁）と2種類ある）。

デュブレ

エルネスト・デュブレ（#1-4）¹⁵とゴシエは、年齢も同じ、高等師範入学やアグレガシオン合格も同年ということから、2人の間には強い仲間意識があったと考えられる。事実、高等師範同窓会誌に掲載されたゴシエの追悼記事はデュブレが執筆しており、高等師範学校時代とそれに続く苦境は、デュブレ自身の経験を通して語られている。

デュブレは、高等師範学校修了後、故郷に近いオセールのコレージュ第3年級の代講教員に任じられるが、すぐにラ・ロシュルのリセ第4年級の代講教員に移された。1853年から1855年までは授業担当教員としてヴァンドームのリセで過ごしている。1855年のアグレガシオン合格後は正教授としてこのリセのレトリック級で教えた。その後、リモージュ、ついでマルセイユのリセのレトリック級教授を勤めた後、1864年9月、アンリ・カトル校の組担当教授として、パリに戻ってきた。1869年から1878年9月まで、ルイ＝ル＝グラン校のレトリック級で教え、その間、正教授に昇進する。1878年コンドルセ校に移り（ジュリヤン・ジラルールと同時期の異動）、1894年10月1日の引退まで母校で教鞭をとり続けた¹⁶。

14 *Léonore* LH /193/61（#6 RS）.

15 Ch, 1879.7.27; Off, 1895.4.18. *Léonore* LH/859/63（#9 EC）.

16 DF3, p. 151#369.

ところで、デュプレは、教える役割にとどまらず、教育制度の改革にも強い関心を示した。1880 年新しい公教育高等評議会が組織される際に、文学アグレジェの代表委員を選出する選挙に立候補している（これについては後述）。1888 年 5 月 26 日から 1894 年 10 月 1 日までパリ大学区評議会委員を務めた¹⁷。その在任期間中、再び 1891 年公教育高等評議会の代表委員の選挙に出馬したが、落選している¹⁸。

デュプレは、ほとんど何も著書を出版していない¹⁹。教科書版のような仕事もない。わずかに 4 点ほど小冊子が CGBN に記載されているにすぎず、いずれも式典用の演説である。その中には、ヴォルテール像の除幕式で行った 2 件の演説が含まれている（1 つは、1887 年 11 月 6 日にパリ市第 9 区役所の中庭に設置された際、もう 1 つは、1890 年 7 月 27 日にフェルネー＝ヴォルテールに設置された際のもの）。実は、デュプレが最も愛好したのは、ヴォルテールであった。同僚モソ（#2-2）は追悼記事²⁰のなかで、こう述べている。

[デュプレ] は、古代の人々を愛した、17 世紀も愛しはした、しかしヴォルテールを熱愛していた。明快で軽やかな文体、大胆な着想、そしてとりわけ自由、寛容、人類愛にあふれた高貴な感情が、デュプレの心をゆさぶった。自身そのように明言していたし、あまりにはつきりと言ったために、ときにはすんでのところで災いをまねくところだった²¹。

また、モソは、母校コンドルセにデュプレの示した愛着を語ったほか、デュプレのひそやかな詩作にも触れ、デュプレが、14 世紀から続くトゥルーズのアカデミー・デ・ジュー・フロローからヴィオレット賞（詩、書簡詩、韻文体の演説を対象²²）を授与されたことを伝えている²³。しかし、

17 LH #6 ES.

18 Jey, *op. cit.*, p. 295-296.

19 同時代に Édouard Louis Athanase Dupré (1839.7.11 - . ENS1859, AgL1863) がおり、こちらには教科書版などの著作があるので混同に注意。

20 *AssENS*, 1897, p. 69-71.

21 *AssENS*, 1897, p. 70.

22 <http://jeuxfloraux.fr/8.html> (2018-03-13 閲覧)

生徒ブルーストの眼には、デュプレが「確かにディエルクスヤルコント・ド・リールを知ってはいる（作品で）。でも、何の役に立つんだ、こういう人間が話しているのを聞いたってさ、そいつは、現代の著作家たちが好きだと言ってもあまりに慎重にしか愛せないんだ。」と映っている²⁴。

ゴシェとキュシュヴァル

マクシム・ゴシェ（#1-3）²⁵は、セヌ＝エ＝マルヌ県モリー（現在はミトリ＝モリー）の村長マクシム・ロラン・ジルー Giroust の家で生まれた。父ジャン・バティスト・ジョゼフ・ゴシェはパリに住む元財務省官吏で地主、母エリザはジルーの娘である。リセ・シャルルマーニュで学んだ後（ジュリヤン・ジラルに教わった²⁶）、1849年高等師範に合格した。同期入学者の中には同じリセ出身のオクターヴ・グレアールがいた²⁷。ゴシェは、1852年に卒業すると、ブザンソンのリセ第6年級の担当講師に任じられる。翌年10月、サン＝プリューのリセのレトリック級の担当講師となる。この町で結婚し²⁸、ようやく3年の「教育経験」期間満了後、

23 *AssENS*, 1897, p. 70.

24 Kolb, t. 1, #7, p. 106. 1888年8月のロベール・ドレフェス宛手紙（28日と推定）。ちなみにこの手紙は教育史家の注意を引いている< Albertini (Pierre).- *L'École en France, XIXe-XXe siècle : de la maternelle à l'université*.- Paris : Hachette, 1992, p. 104-105 >。

25 Ch, 1876.7.26. *Léonore* LH/1087/68（#7 EC）。ゴシェについては、フェレの研究以後、2点の興味深い研究が出た：Pyra Wise, « Une source négligée de la boutade de Gautier sur Racine », *Bulletin d'informations proustiennes*, 32 (2001/2002), p. 9-21; Yasué Kato (加藤靖恵), « Faire des vers parnassiens » : l'abandon du rêve lycéen et la naissance de l'esthétique de la *Recherche* », in Mauriac Dyer (Nathalie) et al. (éd.) - *Proust face à l'héritage du XIXe siècle : tradition et métamorphose*.- Paris : Presses Sorbonne Nouvelle, 2012, p. 27-38.

26 *AnnENS*, 1889, p. 49; cf. DF3, p. 85#13.

27 (1828.4.18-1904.4.25. ENS1849, AgL1854) パリ大学区長代理（1879-1902）として、この時期の教育改革を支えた実力者であった< Condet, *Recteurs d'académie...* [前編注7参照], p. 204-206 >。

28 子供の一人アンリ・ルイ・ゴシェ（1856.1.27-）はのちに司法官となり、アミアン控訴院長になる< *Léonore* 19800035/0108/13575 > ; さらにアンリ・ルイの子マクシム・ルイ・ゴシェ（1887.12.22-1959.12.9）も司法官職について< *Léonore* 19800035/0285/38216 >。

1855 年のアグレガシオンに合格（1 位）、ようやく正教授の道が開かれる。各地のリセのレトリック級教授に任命された後（プレスト 1855、アンジェ 1857、カン 1858）、1860 年パリに移り、コンドルセ校の第 2 年級教授となった。さらに 1864 年レトリック級教授となり、1888 年夏の休職時まで教え続け、まもなく病死した。プルーストたちの学年が最後となる。

教室でのゴシエはどんな教師であったのか？ゴシエの自由な授業ぶりについては、同僚デュブレ筆の追悼記事から窺える：

ゴシエの生徒たちが彼を愛したのも、彼以外に、もっと機知に富み、もっと生徒たちの精神を開き照らし出してくれるような教師はいないと思っていたからである。どれほど多くの生徒がこの素晴らしい授業の思い出を大事にしていたことだろう、彼の授業では、カリキュラムに明記された練習は、即興で、先生の雑談に置き換えられたが、それは知性にとってこの上ない楽しみ、この上ない利益であった。彼の授業では、カリキュラムも威信をいくぶんか失っていたのであろう。だが、聞いている者たちはみな、目を見開き、耳をそばだてており、生徒は、教えられると同時に魅了されたのである [...] ²⁹。

1876 年にコンドルセ校のレトリック級でゴシエに教わった人物の言葉を聞いてみよう。ポール・デジャルダン³⁰は、ゴシエの追悼記事³⁰の中で次のように回想している。

私たちは誇らしげにゴシエ先生の教室にのり込んだ。先生の才気の評判は知っていた。パサージュ・ル・アーヴルで開かれる私たちだけの自称公会議で、先生の記事を読んだことがあるのだ。先生は私たちにとって「文人」であった。当時、私たちにとって、いわく言い難いが教師以上の存在であったのだ。

デジャルダンもまた、ゴシエの奔放な授業風景を描き出している。

29 *AssENS*, 1889, p. 47.

30 Paul Desjardins, « Maxime Gaucher : souvenirs », *Revue politique et littéraire : revue bleue*, 25e ann., 2e trim., t. 42 (3e sér., t. 16), no. 19 (1888.11.10), p. 581-586.

教室に入る時、今日はこれこれの主題で面白い展開を経験できるだろうなどと決して自分に言うことはなかった。先生だって、予想していなかったのだから。私たちの一人が、先生の与えた課業をお国訛りで暗誦した。するとその指摘のあとに次々と逸話が積み上げられていき、その合間に、機敏な繊細さで驚かせる評価が、モンテーニュや、バルザックとランブイエ館、現代劇について差しはさまれていく。魅了されると同時に教えをうけるのだ。いつも記憶にとどめるべきものがあつた。太鼓が鳴り、授業終了が告げられる。すると、その音を聞いて毎日驚いてしまうのだ。ゴシェ先生は、腕を掲げて、こう言いたげだった。「大いなる神よ、何と多くの時間を我々は失ったことか」、すぐその後今度はまた違って「結局、大したことはないんだ、みんな退屈していないし、諸君に言ったことの中には良い所もあるのだから。」という身振りをした。

だが、総視学官の報告や上司たちの意見も概してゴシェに好意的である³¹。デジャルダンも、「ラテン語演説をこれほど上手に添削する人を見たことがない」と「本業」において抜かりがないことを言い添えている³²。さて、プルーストは前出の手紙の中で彼の授業をこう懐かしんでいる：

どうか僕がしたようなことをしないでくれ、先生の前で伝道を行うなんてまねをしないでくれ。僕がそんなことをできたのは、際限なく自由に魅力的な精神の持ち主、ゴシェのおかげだ。僕は、全然宿題らしくない宿題を書いた。あげくに、2か月もしたら、1ダースもバカな奴らがデカダン風にかけていた。[...] 何ヵ月もの間、僕は授業中に自分のフランス語の宿題を読み上げた。やじられたり拍手されたりしたものだ。ゴシェじゃなかったら、八つ裂きにされただろう³³。

31 Ferré, p. 179-181. なお、フェレは、p. 179 で、パリ大学区長代理の好意的評価（「非常に文学的な精神、非常に評価され非常に愛好された作家」）の書き手をリアルとしているが、当時この職にあったのはグレアールである。リアルはこの時点で高等教育局長<Condette, *op. cit.*, p. 204-206, 256-258 >。

32 art. cit., p. 585.

33 Kolb, t. 1, #7, p. 107.

ゴシェの古典関係の仕事には、プラウトウスの『黄金の壺』の教科書版 (L02) とリーウィウスの仏訳 (アシェット、1867) がある。後者の訳は、各種の対訳版に流用されただけでなく、ゴシェの死後も利用された³⁴。しかし、ゴシェを名高くしたのは、このような古典関係ではなく、『政治文学評論』、別名『青色評論』として広く読まれた雑誌³⁵の 16 年に及んだ連載コラムである³⁶。評論家としてのゴシェについて、先ほどの追悼記事のなかで、デジャルダンが、「最近の文学にも非常にオープンだった。彼は、ピエール・ロティの叙事詩的天才を、モーパッサンの視覚的な鮮明さを、ブルジェの分析の犀利さを明言した最初の一人である」³⁷と評価している。

さて、ゴシェの同僚キュシュヴァルについてプルーストはこうスケッチする：

獐猛な小学校の先生風、がさつで粗野な男、だが要するに、それがすこぶる感じがいいってことは請け合ってあげるよ。この、角のとれない、あまりに「露骨な」ブリュヌティエールには風味が欠けてはいない。[...] あれはバカ者だなんて自分に言ってはだめだ、キュシュヴァルは愚か者のふりをしているからだし、この野生の人は甘美なシラブルの結合や言葉の連なりには決して心動かされないからだ。とにかく彼は素晴らしいし、文章を滑らかにするバカ者たちの気を休ませる。[...] 彼はいい先生の理想だし決して退屈じゃない³⁸。

実際のヴィクトル・キュシュヴァル (#1-5)³⁹は学術的な名声を得ていた(兄も著名であった⁴⁰)。ヴィクトルは、レンヌの王立コレージュで学んだ

34 2008 年にガリマル社からフォリオ叢書の一つとして刊行されたモワティ編『ポエニ戦争』でも必要な訂正を施した上で採用されている。

35 プルーストは、1886 年 8 月祖父ナテ・ヴェイユに頼みこの雑誌の定期購読をしていた < Kolb, t. 21, #393, p. 548 >。

36 最後の記事は、1888 年 7 月 14 日号 (no.2) である。死後にルネ・ドゥミックとアンリ・フェラリによって編纂された『文芸閑談』(コラン、1890) は、精選した書評を 17 章にまとめたものである。

37 art. cit., p. 582.

38 Kolb, t. 1, #7, p. 106. フェレの描写はこの手紙に基づく < Ferré, p. 178 >。

39 Ch, 1880.2.9. *Léonore* LH/638/18 (#2 AD, #6-7 RS, #9-10 EC).

後、さらにパリのジュベ寄宿学校に入りアンリ・カトル校に通った。その時の学友には、著名な劇作家となるヴィクトリヤン・サルドゥーやパリ文科大学教授となるシャルル・ルニヤンがいる。1850年入学した高等師範では、歴史家となるフステル・ド・克蘭ジュらと同期となった。

高等師範修了後、まず、リヨンのリセ第6年級の代理教員に任命されるが、すぐにランスの第5年級に送られ、そこで7年を過ごした。とりわけ難関となった1856年のアグレガシヨ試験に合格すると、ランスの第3年級の正教授に昇進した。このランスでは、市庁舎ホールを使った女性向け講演会の企画にも加わった。1860年12月、パリへ移り、コンドルセ校第3年級の担当となり、その後は一時期（1870.1.29-1873.11.6 サン＝ルイ校レトリック級教授）をのぞきコンドルセ校とともに人生を歩むことになる。

1863年に文学博士号を取得していたキュシュヴァルは、パリ文科大学教授アドルフ・ベルジェ（1810.9.2-1869.10.26）の講義用メモなどを遺族から委ねられ、それを基に『ローマ雄弁の歴史、ローマ創建からキケローまで』をベルジェの著作として刊行した（1872）。この著作（アカデミー・フランセーズのモンティヨン賞を受賞）が機縁となって、キケローを中心とした古代ローマの雄弁の歴史の研究に励む。1878年12月から1880年までパリ文科大学コンフェランス担当講師も兼任した。1893年には、ベルジェの著作の続編とも言える『ローマ雄弁の歴史、キケローの死後からハドリアヌス帝の即位まで』を刊行し、アカデミー・フランセーズからボルダン賞を受けた。

こうした研究を背景にして教育面での著作もキケローが中心である。レトリック論抜粋（L39）、書簡撰（L37）、『スキピオーの夢』（L26）という3点のラテン語教科書版を刊行した。とくに『スキピオーの夢』は1919年まで重版が確認できる。キュシュヴァルのレトリックに対する信念の一端はこうした教科書版の前書きに現れている：

実際、どんな学問も時代や国に応じて変わりうる減ぶべき部分を持つ

40 ヴィクトルの兄アタナズ・キュシュヴァル＝クラリニー（1822.2.1-1895.11.3）は、高等師範（ENS1840）や国立古文書学校で学んだ後、高等師範学校（1843-1851）、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館で司書を務め、『両世界評論』などでも活躍した。1860.8.6にOffとなっている<Léonore LH/638/19>。

ているが、不朽の部分もまたそこには含まれている。そうした部分は理性と人間精神の諸法則に基づいていて決して変化しない。使う言語が何であれ、呼びかける聴衆が誰であれ、ある種の規則に従い、決まった方法を用い、様々な手段に訴えなければならない。これらをキケローが発見したわけではないが、自分の経験に照らし合わせてこれらの正しさや効き目を認めた上で自らのレトリック論の数々に集めたのである⁴¹。

このゴシェとキュシュヴァルの組の雰囲気を物語り、2人の教師を対照的に描き出す史料がある。この組の元生徒で、プルーストの3歳年長のエドモン・クルボーの証言である。

[...] 学年の始まりの際、キュシュヴァルは、わざと自分の態度を厳しいものに誇張して示した。全員が何に従ったらよいのかすぐに分ることを、自分が教えているところでは秩序が支配し、それとともに勤勉が支配していることが了解されることを、彼は望んでいたのである。最初の数か月が過ぎると、息抜きをすることもあったが、クラスにはもう「折目」がついており、キュシュヴァルの手中にあったのである。もっとも反抗的な生徒でさえも秩序を尊重し、勉強してみることもあった。

それゆえ結果は良好だった、彼の態度の理由はどうであれ。しかし、ここで是非とも記しておきたいのは、二人の教師の対照的な姿である。一人は、会話中に笑うことを知り、予期しない機知を有し、ぶっきらぼうな考えにも滑稽味のある教師、もう一人は、つねに重々しく謹厳な教師のことである。この二人、キュシュヴァルの教育と彼の同僚であり相棒であったマクシム・ゴシェの教育の間に存していた対照も際立っていた。ゴシェは、教室でおもしろければそれでよかったし、才気煥発な人物だったので、実際愉快な人だった。カリキュラムに明記された練習の代わりに雑談に時間を割く誘惑に喜んで身を委ねたものである。彼は、雑談に優れ、その最中にきわめて多彩な話

41 Cucheval (Victor), éd.- *Cicéron. Analyse et extraits des ouvrages de rhétorique*.- Paris : Hachette, 1877, p. ii.

題、非常に現代的とさえいえる話題について、芸術あるいは文学的な感想を自由に述べたものである。生徒たちにとって当時大変な喜びであった。付け加えておくと、こうしたことは、見かけ以上に利点があったのだ。それでもやはり、こうした影響力にただひたすら流されていたのならば、若い知性たちは、過剰な気まぐれや空想へと逃げ込みかねなかっただろう。だからキュシュヴァルは、釣り合いをとるのに必要不可欠な重りだったのだ。ゴシェに比べると、輝かしくもなく、ひらめきを生徒に呼び覚ますこともないが、逆説をまき散らさず、もっと堅実で、自分なりの流儀で、つまり、作家の本文を掘り下げる熱心さや宿題の添削の細心さで興味深く、我々の精神を正確さに慣れさせ、我々の脳髄に重りを入れて安定を図り、我々に次のような真理を叩き込むのに有用だったのである、空想にどれほど魅力があっても、常識には常に長所があり、理性が最終的には正しいのだということ。全体としてみれば、この二人の教師は見事に相補っていたのである⁴²。

ここでは、エドモン・クルボーは、追悼の対象となったキュシュヴァルに肩入れしているように見える。エドモンは、クロード・クルボー（#2-3）の息子であり、父を超えて、パリ文科大学のラテン語散文講座の教授職にまで到達したのだから当然といえよう。

1880～1889年の異動

年度別に異動をまとめよう⁴³。表1は文法課程の第5年級と第4年級の教員の異動を示す。

42 *AssENS*, 1913, p. 17-18.

43 表1と表2は、*BAMIP*に掲載されたコンドルセ校人事の記録を基にしている。ただし調査した資料の保存状況から、1883/1884年度から1884/1885年度の資料に欠本があり、一部の教員異動のデータが拾われていない（例L、ベルソン死去による異動）。（）内は、前任者の異動理由を示し、退は退職、転は他校への転任、昇はコンドルセ校の上の学年担当への異動、死は在職のまま死去したことを示す。前任欄に（増）とあるのはポスト新設を示す。逆に新任欄に（代）とあるのは、前任者がポストを維持したまま休職を認められた場合の代講 *suppléant* として教えることを示す。

表 1

年度	第 5 年級新任	第 5 年級前任	第 4 年級新任	第 4 年級前任
80/81	ヴァテル	パスケ (死)		
82/83	ブルジーヌ	ゲルゼール (転)	L. ペルソン	(増)
	リュモー	(増)		
83/84	ラファルグ	ボフィス (昇)	ボフィス	マルボン (退)
84/85	ヴァスティカル	ドゥブレール (転)		
85/86	リン	ティリオン (死)		
86/87	フィリップ	アンベール (昇)	アンベール	ブイヨン (退)
			レシュス (代)	アンベール
87/88	カール ⁴⁴	リン (昇)	リン	(増)
			レシュス (代)	アンベール
88/89			レシュス	ルグエ (退)

1881/1882 年度と 1889/1890 年度は異動がなかった。続いて、表 2 は上級課程の異動である。1880/1881 から 1881/1882 年度まではいずれの学年でも異動がなかった。

表 2

年度	第 3 新任	第 3 前任	第 2 新任	第 2 前任	レト 新任	レト 前任
82/83			ドフィネ	ロベール (転)		
83/84	アルベール	(増)				
84/85	空き	ブリュネル (昇)	ブリュネル	ドフィネ (転)		
			ファゲ (代)	ブリュネル		
85/86	サロモン	フジュール (退)				
	モンソー	アルベール (転)				

44 Georges Antoine Karr (1845.3.10, nonENS, AgGr1877).

リセ・コンドルセの教師たち

86/87					ベルナー ジュ	アドレール (死)
					テリエ (代)	レオーム
87/88	デルプー シュ (代)	モンジノ			テリエ	レオーム (退)
88/89	ランティ ヤック	モンソー (昇)	モンソー	キノ (退)	ドフィネ	ゴシエ (死)
	デルプー シュ	サロモン (昇)	サロモン	モン (昇)	モン	タルボ (退)
	ジャキネ ⁴⁵ (代)	モンジノ	マイエー ル ⁴⁶	(新)		
			ランティ ヤック ⁴⁷	モンソー		
	ピカール (代)	デルプー シュ				
89/90	ピカール	ランティ ヤック	レース ⁴⁸	(新)		
	ジャキネ (代)	モンジノ				
	コント ⁴⁹ (代)	デルプー シュ				

45 Pierre Augustin Gabriel Jacquinet (1860.11.30-, ENS1879, AgL1882). Ch. 1925.1.14. *Léonore* 19800035/0261/34862. 父 Claude Prosper Arthur はサント・パルプ校の sous-économiste であった。

46 Henri Joseph Mayer (1861.9.14-, ENS1880, AgL1883) Ch. *Léonore* 19800035/0307/41393. パリ生まれ、ムラン、ボルドー、ランスのリセで教えた後、パリのリセに。コンドルセ校では、1888～1897 年在職。最後はルイ＝ル＝グラン校上級レトリック級教授 < DF3, p. 156#398 >。

47 第3年級教授のまま、モンソーの第2年級担当の代理 *délégation* となっている。

48 Léon Auguste Leys (1837.6.9-1913.3.10, nonENS, AgL1865) ノール県ヴォルムート Wormhout 生まれ。Ch. 1901.7.25. *Léonore* LH/1631/42. トロワ、ディジョンのリセで復習教師を勤めた後、地方のコレージュ教師やリセ講師を歴任、アグレジェ取得後は、ショモン、サントメール、ドゥエ、モンベリエのリセで主に第2年級教授を勤め、1882年からパリのリセに移っている。1889

1887/1888 年度から 1888/1889 年度にかけて大きな異動が生じたことが確認できる。ちょうどプルーストがコンドルセ校で学んでいる間に教師の若返りが進んだのである。

データから見るコンドルセ校の教師像

以上の教師たちについて集团的に考察してみる。ただし、教育史研究でも行われているプロソポグラフィ⁵⁰の手法を適用するにはデータの精度が均一ではない。集められたデータの範囲内で推察できることを述べよう。

教員の出自

年齢

表 3

生年	総数	文法	文学	第 3	第 2	レト
1810-1819	3	1	2	1	0	1
1820-1829	8	4	4	0	1	3
1830-1839	14	4	10	3	3	4
1840-1849	9	5	4	1	3	0
1850-1859	7	1	6	5	1	0
1860-1869	0	1	1	1	0	0
不明 ⁵¹	5	5	0	0	0	0

年から 1897 年の引退までコンドルセ校第 2 年級教授。

49 François *Théodore* Comte (1860.5.6, ENS1881, AgL1884) Ch, 1924.2.28. *Léonore*198000035/0275/36880. パリ生まれ、父 François Prosper は教授、母は小学校教諭。

50 フランス近代史におけるこの手法の適用については小田中直樹の総括がある（『19 世紀フランス社会政治史』山川出版社、2013、後注部 p. 36）。教育史では、高等教育関係者を対象に、クリストフ・シャルルによるもの（Charle1, Charle2 ほか、これはシャルルの「知識人」研究の一環をなす。cf. 白鳥義彦訳『「知識人」の誕生：1880-1900』藤原書店、2006）、池端次郎によるもの（『近代フランス大学人の誕生：大学人史断章』知泉書館、2009）がある。

文法課程の教師は生年不明のデータが多いので、上級課程の教師だけを年齢からみると、2つのピークがある。1830年代生まれの層が最も多い。もう1つのピークは、1850年代生まれの層である。さらに、担当学年ごとに見ると、一番下の第3年級では、1850年代の教師が一番多く、逆に最高のレトリック級では、1840年以後に生まれた者はおらず、1830年代生まれが一番多くなっている。つまり、ほぼ1世代ほどの格差がある（第2年級は、ほぼその中間に位置づけられる）。

ところで、1830年代生まれは、二月革命から第2帝政成立までの政治的激動を青年期に経験する。一方、1850年代生まれは、ちょうど同じ年齢のころ戦争・内乱を経験する。さらに、高等師範学校やアグレガシヨンの合格年も同時期になる。こうした政治的経験や教育経験が彼らの教育にどう現れるのか興味深いところではあるが、今回はそこまで踏み込むことはできなかった。

また、のべ人数の合計で、第3年級が、第2年級とレトリック級のそれぞれに対して多くなっている。これはクラス数の違いというより、異動件数の違いを反映している。つまり第3年級の教員は流動性が高いことを示している。

地理的出自

教員の出生地の分布は合計27県にわたるが、県より上級の行政区分である地域圏 *région*（州とも訳される）を考慮しながら⁵²、6地域にまとめたのが表4である。

表4

地域	[県番号] 県ごとの人数	小計
パリと周辺	[75] 8 [77] 1	9

51 前編執筆時に不明であったドゥロー、L.ベルソン、リセールの実生年月日が判明したので表3に反映させた（順番に1839.8.5; 1843.4.14; 1841.7.1）。

52 2016年1月1日施行の地域圏の新区分で以下のように分けた：パリと周辺：イル＝ド＝フランス；中央部：サントル＝ヴァル＝ド＝ロワール；北部：ノルマンディー、オ＝ド＝フランス；東部：グラン＝テスト、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ；南部：オヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ、プロヴァンス＝アルプ＝コート＝ダジュール、オクシタニー；西部：ヌヴェル＝アキテーヌ、ペイ＝ド＝ラ＝ロワール、ブルターニュ。

中央部	[28] 1	1
北部	[27] 1 [76] 1 [59] 1 [80] 1	4
東部	[08] 1 [10] 1 [51] 1 [52] 2 [57] 1 [21] 1 [39] 1 [70] 1 [89] 4	13
南部	[15] 1 [63] 1 [13] 1 [83] 1 [66] 1 [81] 1	6
西部	[16] 1 [19] 1 [44] 1 [85] 1 [35] 2	6
不明		8

首都とその周辺 (19.1%)、東部 (27.7%) ではほぼ半数に達する割合になり、中央部は 1 名しかおらず (タルボ)、残りを同率 (12.8%) の西部と南部、少し下がって北部 (8.5%) が占めている。

しかし、出生地の記録だけで教師の特質を判断するのは困難である。例えば、ゴシエは、母親の「里帰り」出産のせいで、パリ近郊の村で生まれている。だが、ゴシエの父はパリ市内に住んでおり、ゴシエはパリジャンと言えそうである。その相棒のキュシュヴァルはレンヌ生まれなのだが、ブルターニュ (ブレイス) 人とは言えまい。なぜなら、その父は北部ノール県の出身で、レンヌは仕事上⁵³の任地にすぎないからである。レオン・ロベールの父はサンス在住であったが、さらにレオンの祖父は北部パド・カレー県の出身である。職人 (車大工) としての巡歴の途中でサンスに定住したのかもしれない⁵⁴。

西部出身者では 6 名のうち、父の職業で見ると、リセ・コレッジの教員 2 名、医師 1 名と自由職業や教育関係者が半数を占めている。彼らはキュシュヴァルの父と同様地元出身者でない可能性がある。一方、レンヌ近郊で生まれたボフィス (#5-4) は農業従事者の父を持つ点から土着の西部出身者と考えられる。

南部で出生した 6 名の方も似た傾向である。リンも、ベルナージュも、ドフィネも、リセあるいはコレッジの教師の息子である。おそらくランティヤックとラファルグのみが南部土着の出身ではなかろうか。

出生のコミュヌの規模を見てみよう。付表 1「格」欄は、コムユヌ

53 フランス全国運輸会社 Messageries générales de France の部長であった。この会社は 1826 年にヴァンサン・カイヤール Caillard が創立しフランス全土に展開していた。

54 本稿前編 p. 330 注 79 参照。

を行政上の重要度の観点から4つのカテゴリーに区分したものである。パリは(1)の県庁所在地に含めた。(2)郡中心地に分類したコミューヌのうち現在その地位を失っているところがあるが(付表1「格」欄でアステリスクが付いている)、その当時の状況で考えている(#5-9 アンベールの生地ヴァシーなど)。(1) 県庁所在地で生まれた者は21名(内パリ8名)で全体の44.7%を占める(パリ生まれ17.0%)。以下、(2) 郡中心地9名(19.1%)、(3) 小郡中心地3名(6.4%)、(4) そのほか6名(12.8%)、出身地不明8名(17.0%)という結果である。予想されるように県庁所在地に偏っている。ただよく見ると、パリ以外の大都市、リヨン、ボルドーなどの出身者が一人もいない。その理由は不明であるが、これらの都市のリセが地元の優秀な教師を引きつけている可能性がある。

社会的出自

出生の申告の際、各コミューヌの戸籍担当吏は通常、両親の名前のほかに、年齢、職業(肩書き)、居住地も出生登録簿に記載する。この情報は*Léonore*に残された出生登録簿の抄本にも反映されている(32名分が判明)。この情報を元にして、教師たちの社会的出自を探ってみよう⁵⁵。

注目されるのは、商工業者や職人、農業従事者がかなり見られることである(12名)。砂糖菓子業(#2-1)、鍵製造(#4-5)、車大工(#2-5)、鞍具製造(#1-2)、馬具製造(#2-3)といった製造・販売業者や、庭師(#3-5)のような職人、ルアン織りを扱う夫婦経営⁵⁶の小商い(#2-8)などである。農業関係者もいた(*cultivateur*と記された#5-3と#5-4、*laboureur*と記された#1-7)。古典語とは無縁と思われるこうした職業からもリセ教師を輩出しているのである。さらに目を引くのは、父親がリセやコレージュの教師の場合である。8名が該当し、リセ教師が4名(#5-12, #3-7, #3-9, #2-7)、コレージュ教師が3名(5-9, 3-8, 1-8)、コレージュ校長が1名(#2-6)いる。さらに小学校教員を養成する師範学校校長が1名いる

55 資産規模はこれらの史料からは不明であり、職業名だけでは零細な職人稼業なのか、複数の職人を抱える経営者なのか、単なる商店なのか判断できない。職業分類は、19世紀以後、統計学の発達につれて様々な分類法が用いられ変遷が大きい(分類の変遷については、杉森混一『人口分類と階級分析：フランスの社会職業分類』御茶の水書房、1991)。

56 #2-8の出生証明には、母にも「商人」*marchande*と記載されている。

(#47)。彼らの息子たちは全員、高等師範学校に入った。こうしたケースは、1880 年代の初めはあまり目立たない。だが、1880 年代のうちに、教員における社会的出自の均質化が進んでいる傾向が認められる。

教員の業績

教育の成果をどのような手段で評価するかは現代においても容易なことではない。19 世紀フランスにおいてもそれは同様であるが、一般的には、生徒たちがどんな成果を得たかによって教員や学校も評価されたと考えられる。とくにパリのリセでは、コンクール・ジェネラルが重要な意味を持っている。

コンクール・ジェネラル

コンクール・ジェネラルは⁵⁷、18 世紀半ばパリのある聖堂参事会員の提案と遺贈が契機となって創設された制度で、1747 年に第 1 回のコンクールが実施された。その後、数回の中断や大改編を経ながらも現在まで続けられている。「全国学力コンクール」などと訳されることもあるが、今は原語のまま用いることにする。というのも、19 世紀における実態はかなり異なっていて、「ジェネラル」が全国を指しているわけではなく、首都圏のリセ・コレージュのみが参加していたからである。1864 年に地方版のコンクール・ジェネラルが創設されるまで⁵⁸、地方の生徒や教師には無縁であった。特別数学級の数学部門、哲学級のフランス語論文部門、レトリック級のラテン語演説部門の各 1 等賞は、最優秀栄誉賞 *prix d'honneur* と呼ばれ、垂涎の的であった。

コンドルセ校の教員の中にも栄冠に輝いたものがある。1839 年のジラルル（校長）に続いて、デュブレ（#1-4）は、1848 年ラテン語演説最優秀栄誉賞を獲得した⁵⁹。ポール・モンソー（#3-8）も、ルイ＝ル＝グラ

57 旧稿「ブルーストと哲学教育」でも取り上げた。旧稿で言及した研究の他に、パスカル・モンテュベ（月村辰雄訳）「フランスのコンクール・ジェネラル」月村辰雄編『論集近現代社会と古典』2003（「古典学の再構築」研究成果報告書；8）所収 p. 78-85.

58 1864 年 5 月 28 日のデクレ（デュリュイ）。それ以前にも 1838 年サルヴァンディが試みた。

59 *Centenaire*, p. 68.

ン校の在籍中 1877 年同じ栄冠を勝ち取った。実は、すでにモンソーは、オセールのコレージュ在籍中の前年、地方版コンクール・ジェネラルでラテン語演説 2 等賞を獲得していた⁶⁰。これは、ボールの父でオセールのコレージュのレトリック級教師エティエンヌ・オギュスタン・モンソーの指導の賜物であろう。この父は、すでに 1868 年の地方校コンクール・ジェネラルでも、別な教え子に次席 3 等（新人）を獲得させていた⁶¹。

他部門で 1 等賞をとったものもいる。哲学級ラテン語論文 1 等賞は、1864 年に、ルイ＝ル＝グラン校在籍のレオン・ロベール（#2-5）によって勝ち取られている（フランス語論文部門でも次席旧人 4 等）⁶²。レトリック級フランス語演説部門では、エミール・ファゲ（#2-7）が、1865 年には次席 4 等であったが、旧人として臨んだ 1866 年、1 等賞を獲得した⁶³。

コンクール・ジェネラルにおける生徒の受賞は、指導する教員や在籍校にも榮譽となった。エドモン・クルボーは、先に引用したキュシュヴァル追悼記事でこう続けている。

キュシュヴァル＝ゴシェ組は有名だった。毎年、彼らの組はコンクール・ジェネラルで栄光に包まれた。もっとも有名な者のみ挙げると、レナック、ドゥミック、ベルクソンたちが最優秀の栄冠を勝ち取り、たいいていの場合、キュシュヴァルの実りある教えにこの勝利の名誉を帰したのである。キュシュヴァルは 1880 年に叙勲された。それもレナック兄弟（サロモンととくにテオドル）が彼に与えた未曾有の成功のおかげだと思う⁶⁴。

この記述は 1874 年から 1877 年の受賞者一覧⁶⁵で確認できる（表 5 参

60 *BAMIP*, t. 19, no. 387, p. 506, 512, 518.

61 *BAMIP*, t. 10, no. 181, p. 156. 1870 年にも次席 2 等（新人）<*BAMIP*, t. 13, no. 249, p. 365>、1873 年次席 1 等（新人）<*BAMIP*, t. 16, no. 311, p. 515>。

62 *BAMIP*, t. 2, no. 31, p. 99-100

63 *BAMIP*, t. 4, no. 74, p. 128; t. 6, no. 111, p. 126.

64 *AssENS*, 1913, p. 18.

65 *BAMIP*, t. 17, no. 340, p. 619-624; t. 18, no. 366, p. 510-514; t. 19, no. 387, p. 494-499; t. 20, no. 410, p. 468-472. 言及なしのためレトリック級のドイツ語部門は表 5 から除いた。

照)。1874 年はサロモン・レナックが、1875 年はアンリ・ベルクソンが、1876 年はテオドール・レナックとルネ・ドゥミックが、コンドルセ校からレトリック級新人としてコンクールに臨んだ。

表 5

部門	サロモン (1874)	ベルクソン (1875)	テオドール (1876)
ラテン語演説	次席新人 2 等 (7 位)	最優秀栄誉賞	2 等賞新人 (2 位)
フランス語演説	次席新人 3 等 (9 位)	言及ナシ	1 等賞新人 (1 位)
ラテン語詩	次席新人 2 等 (8 位)	言及ナシ	1 等賞新人 (1 位)
羅文仏訳	次席新人 4 等 (9 位)	言及ナシ	1 等賞新人 (2 位)
ギリシア語仏訳	言及ナシ	次席新人 1 等 (6 位)	1 等賞新人 (1 位)
歴史	次席新人 2 等 (7 位)	言及ナシ	次席新人 2 等 (7 位)
地理	次席新人 7 等 (9 位)	言及ナシ	1 等賞新人 (1 位)
幾何・天文	言及ナシ	2 等賞 (2 位)	2 等賞新人 (2 位)
英語	1 等賞新人 (1 位)	1 等賞新人 (1 位)	1 等賞新人 (1 位)

ドゥミックは、1876 年は級友テオドール・レナックの活躍に隠れて目立たなかったが(フランス語演説：次席新人 1 等 (5 位)、ラテン語詩：次席新人 1 等 (4 位)、ラテン語仏訳：次席新人 1 等 (6 位))、旧人として臨んだ 1877 年、ラテン語演説で 2 等賞 (2 位)、フランス語演説とギリシア語仏訳で 1 等賞旧人 (1 位) を獲得できた。また彼らが、レトリック級だけではなく、他の学年でも好成績を取ったことは言うまでもない。

一方、1864 年の地方のコンクール・ジェネラル創設後、地方のリセやコレージュでも競争が始まる。そこでも、後にコンドルセ校の教員となる人物の活躍が見られる。その好例が、ロペール (#2-5) である。高等師範卒業後着任したばかりのニオールのリセで、2 度も教え子を優秀な成績で表彰させている⁶⁶。アグレガシオン取得後、トゥルーズに転任してからも、1876 年にも好成績を収めさせている⁶⁷。リセル (#3-4) は、パール＝デュックの教師であった 1867 年に、教え子マルシャルにラテン語演説 1 等の皇帝賞を取らせる快挙を遂げている⁶⁸。ドフィネ (#2-6) は、

66 1868 年のラテン語演説部門次席 8 等<BAMIP, t. 10, no. 181, p. 157>、1869 年の同部門では 1 等賞<BAMIP, t. 12, no. 217, p. 78, 80>。このとき受賞したモンテ Montet は、ENS1874, AgPh1877 と考えられる。

67 ラテン語演説部門次席 5 等 (旧人) <BAMIP, t. 19, no. 387, p. 506>。

ニームのリセで教えていた間、2度ラテン語演説部門で生徒を表彰させている⁶⁹。

さて、首都圏のコンクール・ジェネラルは毎年8月初め盛大な褒賞授与式で幕を閉じる。この式典では、ながらくレトリック級の教師によるラテン語演説が花を添えた。コンドルセ校のレトリック教師も、この晴れ舞台に何度も登場した（1864年デルトゥール、1867年ジデル、1869年ゴシエ、1873年ペラン、1876年キュシュヴァル）。1869年8月9日の式典は第2帝政最後となったものだが（1870年は式典は中止⁷⁰）、ゴシエは「レトリック賞讃」という題目で演説を行った⁷¹。アドレールとレオームも、演説の時点ではコンドルセ校の教員ではなかったが、登壇している（それぞれ1866年、1877年）。

このように、1880年のフェリー改革まで、コンクール・ジェネラルは、ラテン語教育の牙城とあってよい様相を呈していたが、フェリーは、標的を見失うことなく、古典中等教育カリキュラムからラテン語作文をほとんど削除した際に、コンクール・ジェネラルでもラテン語演説（レトリック級）、ラテン語ナラシオン（第2年級）、ラテン語詩（レトリック級、第2年級）を廃止している⁷²。1881年の式典からは、褒賞授与式の恒例演説もフランス語に代わり、レトリック級以外の分野の教師も指名されるようになった。その中で、タルボ（1882年）、ファゲ（1889年、ジャンソン＝ド＝サーイ校）の名前も見られる⁷³。

68 *BAMIP*, t. 8, no. 147, p. 84. このマルシャルは、ENS1872, AgGr1875 と考えられる。

69 1874年のラテン語演説部門次席2等(旧人) < *BAMIP*, t. 17, no. 340, p. 631 >、1875年の同部門次席6等 < *BAMIP*, t. 18, p. 522 >。

70 *Journal officiel de l'Empire français*, 2e ann., no. 217 (éd. du matin) (1870.8.9), p. 1339-1340.

71 *BAMIP* では、デルトゥールとアドレールのラテン語原文を再掲している。

72 1880年12月19日のアレテ (*BAMIP*, t. 23/2, no. 461, p. 1688-1689)。ただし、レトリック級では「ラテン語作文かラテン語仏訳」、第2年級でも「ラテン語練習かラテン語仏訳」という形でラテン語作文出題の可能性を残した。しかし最優秀栄誉賞は、フランス語作文の1等賞に与えられることとなる。

73 拙稿「ブルーストと哲学教育」p. 124-125.

教科書版

付表 2 にまとめたようにコンドルセ校教員の編纂した講読用教科書版の多彩さは目をひく。カリキュラム指定の作家をかなりの程度網羅している。ただし、実際の教室における作家と教科書の選択については更なる調査が必要である。

では、教科書版の対象となった作家の分布から、個々の教員の傾向はつかめるだろうか。この問題については、出版社側の事情を考慮する必要があり、本稿で示された分布状況をもって、教員たちの志向と同一視することは即断であろう。

ラテン語作文をめぐる論争

「教育界のアンシャン・レジーム」を終わらせたと評される 1880 年代の改革の際⁷⁴、古典中等教育では、ラテン語作文が最も激しい論議的になった。この論争へのコンドルセ校の教師たちの関与はプロフィールの中でも言及したが、更に 2 つの場面で見てみたい。

1880 年の公教育高等評議会代表選挙

1879 年の共和派勝利の後、新しい公教育相ジュール・フェリーは、ただちに公教育高等評議会 *Conseil supérieur de l'instruction publique* の改組を図った。1879 年 3 月 15 日に法案を提出し、議会での激論をのりこえ、翌年 2 月 27 日公布にたどりついた⁷⁵。新法では、一部を除き大部分の委員を代表のカテゴリーごとに互選ないし選挙で決める方式となった。中等教育のアグレジェの代表（各専攻別に 1 名）は全国に分散しており、適切な選挙のための情報交換の場が必要であった。それを可能にしたの

74 Cf. Albertini, *op. cit.*, p. 3.

75 新しい公教育高等評議会法は、教育関係の法令の審議権を握るこの評議会から教育界（教員と公教育の行政官）以外のメンバーをすべて排除し、教育界の各集団から代表を集めるというもので、教育改革推進の基盤となった。小野田正利「フランスにおける教育審議会の成立と展開：第 3 共和制初期の公教育高等評議会改革」『教育学研究』53:2 (1986.6), p. 30-40, とくに p. 35 参照。Yves Verneuil, « Corporation universitaire et société civile : les débats sur la composition du Conseil supérieur de l'instruction publique pendant la Troisième République », *Histoire de l'éducation*, 140 + 141 (2014.1), p. 51-72.

リセ・コンドルセの教師たち

が、『ユニヴェルシテ通信報』⁷⁶である。1880年2月19日にその第1号が刊行された。発行人・書記長オギュスト・ビュルドー⁷⁷らの編集委員会を中心に、全国の16大学区すべてに通信員⁷⁸を配置しようとした。それらの構成員を表6に示す（所属は当時、特定した上でENS, Agrの情報を付加）。

表 6

役割	氏名 (*は既出)	所属 (リセ)	ENS	Agr
編 (書記長)	ビュルドー Burdeau	パリ、サン＝ルイ	1870	Ph1874
編 (副書記長)	ラニョー Lagneau	ナンシー	1872	Ph1875
編	ブロシャール Brochard	パリ、コンドルセ	1868	Ph1872
編	ブリュネル Brunel	ナンシー	1872	L1875
編	グリエ Gourier	アミアン	1876	Math1879
編	ジョリ Joly	パリ、アンリ・カトル	1867	Phys1871
通エクス	ドゥルー Dereux	マルセイユ	1865	Ph1868
通ブザンソン	(暫) ラニョー *			
通ボルドー	ダルリュ ⁷⁹ Darlu	ボルドー	non	Ph1871
通カン	ボワラック Boirac	ルアン	non	Ph1874

76 *Bulletin de correspondance universitaire* (以下 *BUC* と略す) は、ジェルメール・パイエル (哲学を中心とする専門書の出版社、アルカン社や PUF の前身である) から刊行、1880年5月8日付第14号まで確認できる。

77 Auguste Burdeau (1851.9.10-1894.12.12), Jules Lagneau (1851.8.8-1894.4.22). ともにナンシーのリセ (ブリュネルもレトリック級で教えている) で哲学を教えた。ラニョーは哲学者アランの師としても有名。ビュルドーは後に政界に入り、下院議長も務めた。モーリス・パレスの問題小説『根こそぎにされた人々 (デラシネ)』で標的とされたのはこのビュルドーだと言われる (Sirlinelli, « Littérature et politique : le cas Burdeau-Bouteiller », *Revue historique*, 272 (1984)). Victor Brochard (1848.6.29-1907.11.25) は、後に高等師範学校教員を経て、パリ文科大学教授となっている < Charle 1, #15, p. 36-37 >。ブルースト研究者にとっては、ブリショのモデルとして知られている。ブリュネルは拙論前編参照 #3-6。グリエ Georges Gourier (1856.4.5-)。ジョリ Alexandre Joly については未調査である。

78 *BUC*, no. 1, p. 1 (編集委員 : 表中「編」), 12 (通信員 : 表中「通」と大学区名)。

79 後にコンドルセ校の哲学教授となるアルフォンス・ダルリュである。ダルリュは、この雑誌でもかなり積極的に発言しているが、本稿では扱わない。

通シャンベリー	(暫) ルヴォワール Revoil	シャンベリー	1867	
通クレルモン	フィリベール Philibert	クレルモン	1869	Ph1873
通ディジョン	(暫) ラニヨー*			
通ドゥエ	セアイユ Séailles	ドゥエ	1872	Ph1875
通グルノーブル	「後で指名される」			
通リヨン	ルブラン Repelin	リヨン	1847	L1853
通ナンシー	ラニヨー*			
通モンペリエ	(暫) ノレン Nolen	モンペリエ工科大学	1858	Ph1863
通ボワティエ	ラロック Laroques ⁸⁰	ナント	1858	Math1863
通レンヌ	ラロック*			
通トゥルーズ	ドンブル Dhombres	トゥルーズ	1865	HG1872
通アルジェ	ヴァイユ Waille	アルジェ	1873	L1878

編集委員・通信員の構成から看取されるように、この『ユニヴェルシテ通信報』は、1870年代前半にアグレガシオンを通過した世代、つまり1870年の戦争を20歳前後で経験した世代⁸¹で哲学教授となった高等師範学校卒業生たちを中心にして組織されている。彼らのネットワークが効率的に活用されたことが窺える⁸²。

さて、この活動にいち早く反応した一人が、コンドルセ校のデュプレ(#1-4)である。デュプレは、第1号、第2号(2月26日)、第3号(3月4日)で、中等教育改革に関する提言を公にしている。第2号の書簡⁸³では、1872年9月27日の通達でジュール・シモンの示した諸改革を受け入れ、改革者の側に立つと宣言した上で、この改革には、自分にとって犠牲にしなくてはならない点があることも隠さない。

80 Louis Eugène Larocque (1838.9.24, ENS1858, AgMath1863) と考えられる。

81 なかでもピユルドーは戦功によってレジヨン・ドヌールを受勲していることが注目される(他の受勲者はシャルヴ Charve, ENS1869, AgMath)。戦時の生徒たちの動向は、1871年12月27日の始業式の記事、特にそこに収録された総生徒監ギユス(#PC-2)による報告書に詳しい(*BAMIP*, t. 14, no. 273, p. 607-640)。

82 Y. ヴェルスイユ(上記論文)によれば、高等師範学校校長ベルソの働きかけがあったという。

83 *BCU*, no. 2, p. 19-21.

たしかに、詩作の練習〔ラテン語詩のこと〕は快い知的遊戯であり、工夫と繊細さを要する作業である。そこで勝ち誇るのは、記憶の見事な働きであり、趣味の洗練であり、生まれ出んとする想像力の優雅さであり、ある種の文学的な判定力である。パリや地方の大リセのいくつかのレトリック級の教師にとって、自分の生徒たちのなかの5ないし6人がこの種の作文で人に抜き出ようと鎬を削るのに間近で付き添うのは、真の楽しみなのである。

しかし、こうした「楽しみ」を「必要ならば犠牲にしたことを決して誰も後悔しないだろう」という。それは、次のような現実の教室で起こっている惨状に目をそむけられないからである（追悼記事の中でもデュプレの社会貢献が語られているように）。

だがしかしそれとは全く反対に、嘆かわしい光景 *spectacle affligent* が目に入るのだ。他の生徒たち、数はずっと多いのだが、彼らは、自分のせいだと認めなくてはならない無能という責めを甘んじて受け入れると、この練習には知らぬふりをし続けるか、それとも、心ならずも、自分たちの精神に何の得にもならないまま練習に打ち込んでいる。

デュプレは、ラテン語詩以外にも、最良の生徒たちの才能を伸ばせる手段があることを認める。ラテン語演説についても同様の確認をしている。

コンクール・ジェネラルで栄冠を授けられるラテン語演説は、それらの書き手たちの正確さや優雅さを、さらに精神的な成熟すら、もっともよく描き出してくれる。そしてこうした生徒たちを養成した教師や学校にも名誉を施すのだ。だが、すこし下の方をも御覧いただきたい。嘆かわしい光景 *spectacle affligent* ではないか、バカロレアのラテン語演説のそれは。痛々しくはないか、このような試験を代償にして成績優良免状を獲得するのだと思うのは、自分に正直になろう。

デュプレはこうしてバカロレアの問題にも触れているが、具体的な提案を出しているわけではない。それでも、改革が1872年の改革（とはいっ

でも挫折したわけだが)をさらに超えていかななくてはならないことも自覚しているのである。

第 4 号 (3 月 11 日) ではデュプレの立候補の動きが報じられ、推薦人の呼びかけ (第 6 号、3 月 18 日) に答えてデュプレは立候補を表明する。第 6 号に掲載された決意表明の書簡⁸⁴では、ラテン語作文について旗幟を鮮明にしている。「私は、ラテン語詩と仏語ギリシア語訳の廃止に賛成する。バカロレアでラテン語作文の廃止を提案したのだから、我々の文学の学年でこの練習が占める過剰な重要度に対し異議を唱えるのは自明である。」しかし、デュプレは不振の原因を文法級での教育に求めているようである。文法課程での教育の根本的な改善を望んだ上で、進級試験、とくに文法課程諸学年から文学上級課程への進級をもっと厳格にコントロールするよう提案している。さらに付け加えて、文学史の学習を行い、書く練習を減らした分だけ生徒たちが読む時間を増やすようにしたいという希望を述べた。

対立候補となったモレル⁸⁵は、パリのアンリ・カトル校の第 2 年級教授であった。第 6 号に掲載された出馬要請に対して、モレルの受諾回答が掲載された (第 7 号、3 月 21 日)⁸⁶。その中で、モレルの基本方針が最初に示されている。「もっとも自由な方向で我々の古典教育システムを修正し、付随的と見なされてきた学習により多くの余地を与えること」に賛同し、子供を「機械的で不毛であり意識せずになされる作業から解放」して、「思考、自発性、責任」を最高度に発展させることを教育目標に据えたいという。こうした基本的姿勢を示した上で具体的な改革案がまず 2 つ示されている。1 つ目の案は、中等教育課程を分割した上で、第 1 段階に共通で義務的な「基礎中等教育」を創設し、その内容は、「フランス語、現代外国語、科学・歴史・地理の初歩」に限定し、「基礎中等教育」修了者には試験を課した上で修了証明を出すというものである。ここでは、古典語の学習に一切触れていないが、その学習がバカロレアにつながる第 2 段階に限定されるということの意味する。2 つ目の案は、古典語も対象とした

84 *BCU*, no. 6, p. 61.

85 Maximilien Georges Morel (1842.10.20-1915.2.21, ENS1860, AgL1865) Off. *Léonore* LH/1934/13. 1882 年文教行政に入り、1887~1889 年中等教育局長を務めた < IGIP, p. 513-514 >.

86 *BCU*, no. 7, p. 68-69.

即効的な改善策である。フランス語・ラテン語・ギリシア語が同じ教員によって教えられるという従来の原則に対して（パリでは、ラテン語担当とフランス語・ギリシア語担当に分かれる）、1言語1教員の担当という改善案である。さらに、生徒に対しても、3言語を同じ進度で学習するのではなく、言語ごとに違った進度を認める自由が、この改善で与えられることになる。モレルは「この重要な改革は今からでも可能だろうか、すでに提案されているだろうか？それについてはわからないが、この改革を黙過することは容認できないと私には思われる」と付け加えている。この2つの提案の他にも「すぐにしかも容易に実行できる」提案を7つ箇条書きで示している：

- 1) 書く宿題を定期的に行うが、量を減らすこと。
- 2) 文学史を早くから始めること。
- 3) フランス語著作家の言語学的、歴史的、文学的学習。
- 4) ラテン語作文の「絶対的・決定的」廃止。
- 5) 古典語の学習年齢を12歳くらいからにすること。
- 6) リセにおける教科書指定の廃止。
- 7) 学年末、学期末試験の厳格化。

これらの中で、4番目のラテン語作文廃止が改革の大きな争点になったものである。モレルは、ラテン語作文のカリキュラムからの廃止がバカロレアやリサンス試験の科目からの廃止とも連動していることを認識しており、ラテン語作文の自由選択による実施は授業外であれば可能とした。

4月15日の第1回投票⁸⁷は、文学アグレジェの登録者154名のうち、147名が投票し（白票が2票）、表7のような結果となった（比率を算出、特定した上でENS, Agrの情報を付加、任地もエルボー以下は他資料で補った）。

表7

候補者名	獲得票数	比率 ⁸⁸	任地	ENS	Agr
モレル Morel	63	43.4	パリ、アンリ・カトル	1860	1865
デュプレ Dupré	43	29.7	パリ、コンドルセ	1849	1855

87 BCU, no. 13, p. 110; *Journal officiel de la République française* (以下JOと略す), 12e ann., no. 112 (1880.4.23), p. 4371.

88 有効票総数(145票)に対する獲得票数の百分比。

メルレ Merlet	24	16.6	バリ、ルイ＝ル＝グラン	1848	1851
エルボー Herbault	10	6.9	ディジョン	1855	1858
フルネ Fournet	1	0.7	ボルドー	1849	1856
アツフェルド Hatzfeld	1	0.7	バリ、ルイ＝ル＝グラン	1843	1860
アンリ Henry ⁸⁹	1	0.7	ルアン	1851	1857
ジャコブ Jacob	1	0.7	バリ、ルイ＝ル＝グラン	1853	1856
ルジュール Lehugeur	1	0.7	バリ、ルイ＝ル＝グラン	non	1853

デュプレは 2 位に終わった。1 位モレルも過半数 73 票に達せず、第 2 回投票が行われることになった。若いモレルが 50% に迫る支持を集めたが、最年長組のデュプレとメルレ⁹⁰も、結束すればそれを超えて過半数に迫っており、拮抗した局面である。デュプレとエルボーは、第 13 号（4 月 25 日）で、モレル支持を呼びかけて立候補を辞退した⁹¹。

第 2 回投票（4 月 29 日）⁹²では、登録者 153 名のうち、150 名が投票し（白票 2）、モレルが 80 票 54.1% を得て当選した。2 位のメルレは 67 票（45.3%）、辞退したデュプレにも 1 票が入れられている。

それでは、各候補者に投票したアグレジェたちはどんな人々であったのか。手掛かりとして、『ユニヴェルシテ通信報』に掲載された支持表明から探してみたい。デュプレには、5 人のアグレジェから支持表明が出された（表 8）⁹³。

89 Auguste Dominique Henry と考えられる。1884 年の段階でルアンのリセのレトリック級教授である。同姓でもっと若い Paul Henry（ENS1859, Agr1862）の可能性もある。

90 Marie Joseph Gustave Claude Merlet (1828.10.7-1891.2.17) Off, 1878.12.31 <DF3, p. 150#364 >. メレル自身は立候補を表明していなかった。この後 1887 年と 1888 年の代表選挙で選出され、1891 年まで委員を務めている <Jey, p. 290, 293-294 >.

91 BCU, no. 13, p. 112-113.

92 BCU, no. 14, p. 117; JO, 12e ann., no. 126 (1880.5.7-8), p. 4922.

93 BCU, no. 6, p. 61. 表 7 と同様、ENS, Agr の情報は特定の上補っている。

表 8

支持者名	任地	学年	ENS	AgL
ブリュネル Brunel	ナンシー	Rh	1872	1875
シャナル Chanal	シャルルヴィル	Rh	non	1878
ドゥロ Droz	ブザンソン	Rh	1874	1877
エデ Édet	ポー	Rh	1873	1876
モソ Mossot	パリ、コンドルセ	2	1856	1860

そこには、コンドルセ校の同僚モソ（#2-2）や未来の同僚リュシヤン・ブリュネル（#3-6）の名があることに注目しておきたい。

第1回投票で第4位10票を得たエルポーの支持表明は表9の通りである⁹⁴。エルポーの立場は、デュプレよりもさらに穏やかな改革志向である⁹⁵。

表 9

支持者名	任地	ENS	AgL
ペリシエ Pellissier (Georges)	トゥール	non	1876
アルヌー Arnould (Victor Auguste)	ボワティエ	1862	1873
グルサール Groussard (Émile)	リモージュ	1876	1879
ベルジェ Berger	リモージュ	non	1877
ペリソン Pellisson (Maurice)	アングレーム	1871	1874
ゲリヨ Guérillot (Angel Alexandre)	アングレーム	non	1878
グランサール Grandsart (Louis Charles)	ルアン	non	1851
ユヨ Huyot (Alfred Jean Bernard)	ルアン	non	AgGr1872
デュボワ Dubois (Adolphe)	ルアン	non	1850
シャルドン Chardon (Henri)	ボワティエ	1842	1855
デュボン Dupont (Paul)	ドゥエ	1871	1875
ニコラ Nicolas (Jacques Louis Georges) ⁹⁶	ドゥエ	non	1876
ルネル Lenel (Scipion)	アミアン	non	1876

94 BCU, no. 7, p. 69; no. 8, p. 75-76. ENS と Agr の情報は、特定した上で補っている。

95 BCU, no. 8, p. 75.

ロワイエ Royer (Jean Baptiste)	ディジョン	1854	1861 (AgGr1860)
----------------------------	-------	------	-----------------

エルボーの支持者には高等師範学校出身者は少なく（14名中4名）、地方でも小規模校の教員が目につく（リモージュ、アングレーム、アミアン）。また年齢層が極端に分かれているのも特徴であろう。

一方、モレルに対しては、少なくとも 20 名の支持表明が寄せられている（表 10）⁹⁷。

表 10

支持者名	任地	学年	ENS	AgL
コリニョン Collignon	ナンシー	Rh	1862	1866
リセール Risser (#3-4)	ナンシー	2	1861	1864
カザノヴァ Casanova	マルセイユ	Rh	1869	1873
プレソワール Pressoir	マルセイユ	3	1870	1874
デュピユイ Dupuy	ボルドー	Rh	1869	1873
ペリエ Périé	ボルドー?		non	1878
アレーグル Allègre	ボルドー?	3	non	1877
ストロペノ Stropeno	リヨン	3	non	1874
エモン Hémon	プレスト	Rh	1869	1873
ジェロー Géraulx	ランス	Rh	1869	1875
マルシャン Marchand	ランス	2	non	1876
ルメートル Lemaître	ル・アーヴル	Rh	1872	1875
フルリシャン Fleurichand	ル・アーヴル	6	non	1879 (AgGr1878)
ラーム Lame	ナント	Rh	1868	1877
ピション Pichon	パリ、サン＝ルイ		1864	1871
メリメ Mérimée	トゥルーズ		1867	1871
ドゥアン Doin	マルセイユ		non	1877
ベトゥ Bettout	クレルモン		1874	1877

96 AgL1853 の Jean François NICOLAS の可能性もまだ消去できていない。

97 第 6 号でピションまでの 15 名、第 7 号から第 11 号までさらに 5 名支持表明者が増えた (BCU, no. 6, p. 62; no. 7, p. 69; no. 8, p. 76; no. 9, p. 88; no. 11, p. 104)。ENS、Agr の情報については、表 9 と同様。

ブルシエ Bourciez	ニース		1873	1876
アレー Allais ⁹⁸	カン		1874	1878

ピジョンを除き、すべて地方リセの教員である。高等師範学校出身者は14名で、世代的には、4名の1869年入学組を中心に、在学中戦争を経験したり、まだ戦争から間もない時代に入學した世代が占めている。残り6名の非出身者は、地方の有力リセで教えるまだアグレガシオン取得から5年も経っていない一番若い世代である。

このような支持表明者リストからは、徹底した改革を望む地方のリセの教員、特に若い教員たちの厚い支持層の存在が感じられる。一方、これらのリストにはパリの教員の名が殆ど現れていない。それは、改革に対する無言の抵抗の意思表示であったのかもしれない。そのようなパリの教員の本音が窺えるのが次の史料である。

中等教育問題研究会

中等教育問題研究会 Société pour l'étude des questions d'enseignement secondaire の記録がそれである⁹⁹。『ユニヴェルシテ通信報』が中等教育教員専用の議論の場であったのに対して、こちらは、高等教育や私学の関係者も含む広範囲の人々の参加する議論の場であった（ダルリュのように両方の場で発言する人物もいた）。この研究会での議事録や会合で読み上げられた意見書などは同名の機関誌で読むことができる。その中から、文系教育の諸問題を扱う研究会第2グループの議事録を見てみよう。第2グループでは、フォルトゥール改革で導入されたバカロレア筆記試験におけるラテン語作文の廃止が最初の議題となっていた。この議論には、コンドルセ校の教員も参加している。

1880年1月22日の第2グループの会合初回は、議題の設定で終わった。文科バカロレアの筆記試験が取り上げられることになった。

98 アレーについては、拙論「17世紀の著作家はリセでどのように読まれていたのか」『仏語仏文学研究』49（2016.10.19）、p. 366-367 参照。

99 同名の機関誌 *Société pour l'étude des questions d'enseignement secondaire* [以下 *SEQES* と略す] の表紙には、1879年12月26日パリ警察庁認可とある。事務局は、パリ、サン＝ペール街 rue des Saints-Pères 15番地に置かれた。初代会長はミシェル・ブレアル（前編 p. 216 注）。

同年 2 月 5 日に開かれた会合では、まず 6 名から送付されてきた意見書を読み上げられた（その一つはボルドーのダルリュのもの）。いずれもラテン語演説の廃止に賛成するものであった。その後、出席者による討論が行われた。主な廃止賛成派はマリオン、ルモニエ、アルフレッド・クロワゼ、主な廃止反対派はメルレ（議長）、ルベーク、ベルトランであった。

同年 2 月 26 日の会合（議長メルレ）でも、意見書の読み上げとガイヤルダン、A. クロワゼ、ピジョノー、ルモニエ、ジュリヤン・ジラル（コンドルセ校校長。この研究会の副会長でもあった）らの討論があった。議長から決議の提案があったが、さらなる検討が必要との動議がデュビエフから出され、受け入れられた。

同年 3 月 11 日の会合は、ラテン語演説廃止についての結論を出すことになっており、3 通の意見書読み上げと活発な討論の後、採決が行われた。その結果、文科バカロレアの試験としてラテン語演説を維持する必要がないという多数意見が確認され、次回の会合から、ラテン語演説に代わる筆記試験に関する議論に移ることになった。

さて、2 月 26 日の会合では、廃止反対派の重鎮ルベーク¹⁰⁰の提出した意見書（本人は欠席）の読み上げとそれをめぐって行われた廃止賛成派の急先鋒アルフレッド・クロワゼ¹⁰¹の反駁、そしてジュリヤン・ジラルの所見を見てみよう。

ルベークがラテン語演説廃止によって危惧するのは、ラテン語演説を支えてきた下位の練習も必要なくなってラテン語学習全体が壊滅し、かつてフォルトゥール期に生じた学力低下が再現するのではないかという点にあった¹⁰²。これに対して、クロワゼは、まず古典教育の目的を「精神を高め、美的かつ道徳的な高度の教養を与える」ものとして、ルベークも含め

100 Charles Hubert Lebaigue (1820.11.19-1903.8.29, nonENS, AgGr1847). シャルルマーニュ校教授、1880 年公教育高等評議会の文法アグレジエ代表委員にこの後選出されている。

101 Marie Joseph Alfred Croiset (1845.1.5-1923.6.14, ENS1864, AgL1867) ルイ＝グラン校在学中はコンクール・ジェネラル受賞の常連であり、高等師範学校ではジラルにも習った。1880 年当時は、パリ文科大学講師としてギリシア語文学を講じていた。1885 年から 1921 年まで同大学（パリ大学文学部）ギリシア語散文講座教授。< Charle 1, p. 47-48 > 弟モリスはコレージュ・ド・フランス教授となる。

102 SEQES, t. 1, no. 1 (1880.3), p. 14. ルベークの意見書全体は p. 60-69 に収録。

グループの全会員との相違がないことを確認する。その上で、古典教育の崩壊を恐れるべきではないし、少なくとも仏文ラテン語訳には言語を学ぶ上での価値がある限りリセの教育に残るとしている。そして、現状に目を向けるよう訴えている。議事録を引用する。

実際、これは議論の余地もないことだが、我々の生徒たちは、レトリック級卒業後、学習したとされているテキストを知らないのである。彼らは、ギリシア・ラテン文学についても、古典作品についても、その作家たちの精神や性格についても、ソルボンヌの講義に出席している少女たちよりも知らないのである。ところで、こうした状況は、ラテン語演説が現在の枢要な位置を占める限り治療不可能なのである。ラテン語演説が、すべての真剣な改革に対抗する障害となるのである。だからこそ、クロワゼ氏は、それを廃止することから始めなければならないと考えている¹⁰³。

続いてピジョノーとルモニエの意見交換が行われた後、クロワゼの旧師ジラルールから発言があった。

ジュリヤン・ジラルール氏は、いくつか所見を示し、ラテン語作文の練習は、クロワゼ氏の意見とは反対に、作家のテキストと古代の精神を知らしめるのに役立つこと、また、レトリック級を終えた生徒は、授業で話されたことを一言も聞かなかったというのでない限り、ソルボンヌの講義に通う優秀な女生徒たちよりも古代文学をずっと知っているということを明らかにした¹⁰⁴。

単なる揚げ足取りのようにも見えるが、言語や文学を知る、それも深く知るために書く練習が必要であるという議論は理解できないものではない。ただ、大多数の生徒にそこまでのレベルを求めることが適切かという視点がジラルールに欠けている。

3月11日の会合に移る。アルフレッド・クロワゼからは、新しいカリ

103 *SEQES*, t. 1, no. 1 (1880.3), p. 15.

104 *SEQES*, t. 1, no. 1 (1880.3), p. 16.

キュラムの基本構想の一例（レトリック級）が提示された。狙いは、フランス語説明に多くの時間を割くことと授業外での読書を増やすことにある。そのために時間の再配分（週 16 時間ならフランス語に 7 時間を割く）と宿題の削減が必要になる。練習については、ラテン語仏訳とギリシア語仏訳は維持、ラテン語演説の代わりに仏語ラテン語訳をやらせる（能力のある生徒にはラテン語詩も含むラテン語作文も可能）。ただし量については、ラテン語の練習は月 1 回、フランス語の作文は月 2 回とする。宿題の量が減って添削に使っていた授業時間に余裕ができるはずなので、文学史を講義する（2 週間のうちに 1 時間程度）。このような内容であった¹⁰⁵。議長メルレもクロワゼ案は革命ですらなく改良であると評価し、現状にかなり適合した案であると理解を示した。その後、いくつかの質疑応答¹⁰⁶が続いたが、決議採択の時間が迫ってきた。そこでジラル氏は最後の介入を試みる。議事録を引く。

ジラル氏は、提案されたカリキュラムは教室でなすべき練習の単純な再配分といったものではなくそれ以上のもので、これは学習の完全な改革であると主張した。そして、氏にとって、問題の現在の状況では、授業からラテン語演説を消失させることになるようなラテン語演説の廃止について自分は評決することができないと宣言した¹⁰⁷。

いくつかの所見が示されたが、議長は討論終了の動議を出し可決させた。この後、決議文の原案について意見交換が行われ、コンドルセ校のプロシヤールの提案「ラテン語演説はバカロレアの試験として維持されるべきか」に基づき、採決が行われ、ついにラテン語演説の廃止が研究会第 2 グループの総意となった。

このような熟議が新生の公教育高等評議会の議論に落とし込まれていく。その第 1 会期は古典中等教育の改革に焦点を絞り、1880 年 5 月 31 日

105 *SEQES*, t. 1, no. 2 (1880.5), p. 138-139.

106 キュシュヴァルは、バカロレア受験に要した中等教育修了書の撤廃（1849 年 11 月 16 日のデクレ）を想起して、バカロレアにおけるラテン語作文の廃止がリセの教室の荒廃を招くことを懸念するという発言をしている<*SEQES*, t. 1, no. 2 (1880.5), p. 139 >。

107 *SEQES*, t. 1, no. 2 (1880.5), p. 140.

から6月17日まで続いた。その成果は、文科バカロレアを改革する1880年6月19日のデクレとアレテと、新カリキュラムを定める同年8月2日のアレテに結実する。ラテン語作文は、バカロレアからは完全に、カリキュラムからも殆ど姿を消す¹⁰⁸。

その2日後、ソルボンヌの大講堂で執り行われたコンクール・ジェネラルの褒賞授与式で、シャルルマーニュ校レトリック級教授カルトーが、伝統の掉尾を飾るラテン語演説を述べ終わった後、ジュール・フェリーは、ユニヴェルシテ総長としてフランス語で高らかに宣言した。

紳士の皆様、親愛なる生徒諸君、ラテン語演説に対する最後の別れの挨拶を学識あふれる弁舌で受け取ったばかりです。今度は私からも、消え去ろうとしているユニヴェルシテの王権にお別れ申し上げることをお許し願いたい。キケロー風総合文が、古きソルボンヌのアーチの下に鳴り響くのは最後となりました。ラテン語演説は最後の言葉を発しました。ラテン語演説はその生を終えたのです¹⁰⁹。

この« Le discours latin a vécu ! »の1節に、ラテン語に通じた列席者は思わず苦虫をかみつぶしただろう。キケローがカティリーナの一党の処刑後放ったと言われる名高い一句« Vixerunt. »のもじりなのだから。

終りに

プルーストが在学していた時代、コンドルセ校のベテラン教師は、校長の理解と暗黙の庇護のもと、古典中等教育の改革には消極的な姿勢を示した。だが、教員団の若返りが着実に進み、改革を受け入れる中堅の教員や新しい教育理念に魅かれる若手教員もすでにコンドルセで教えていた。そ

108 *BAMIP*, t. 23/1, no. 454, p. 675-683; no. 456, p. 890-973 (とくに、p. 902 と 905)。後者には「ラテン語練習」(第2年級)、「ラテン語作文」(レトリック級)の文言が残っている。これらの文言の解釈については、公教育高等評議会の説明を見るべきである (*Idid*, p. 975-976)。

109 *JO*, ann. 12, no. 213 (1880.8.5), p. 9098. 1880年のコンクール・ジェネラルは *BAMIP* のほうでは記録が見られない。デュリュイ時代の厚遇ぶりとは様変わりである。

の一方で、社会的出自や地理的出自の面で多様であった教員団が均質化に向かう傾向も見て取れる。

1880年代のリセ・コンドルセは、異なる教育理念が接する境界面に位置し、いわば、海水と淡水の入り交じる栄養豊富な汽水域のような場所だった。その中でプルーストは、同人誌を作り、文学への夢を仲間たちと語り合った。仲間の一人ダニエル・アレヴィ（1872.12.12 - 1962.2.4）の習作を添削する体で、プルーストはこのような教訓を余白に書き込んで送り返している。

若者よ読み給え、ホメーロスを、プラトーンを、ルクレーティウスを、ウェルギリウスを、タキトゥスを、シェイクスピアを、シェリーを、エマソンを、ゲーテを、ラ・フォンテーヌを、ラシーヌを、ヴィヨン、テオフィルを、ボシュエを、ラ・ブリュイエールを、デカルトを、モンテスキューを、ルソーを、デイドロを、フロベールを、サント＝ブーヴを、ボドレーを、ルナンを、フランスを、そしてなかなづくリュドヴィク・アレヴィを¹¹⁰。

とんだオチをつけ冗談めかした忠告で、当時の教室の中で絶対に肩を並べることができないような作家を列挙している。デカダンス派の流行のなかでその強い魅力に全面的に屈服しないバランス感覚を、プルーストはリセ時代に養ったことを示した。

教育が青少年に及ぼす変化は疑い得ないものがあるが、その変化を正確に測定し教育という要因に帰することはきわめて困難である。しかし、プルーストの場合さまざまな材料が残されている。そうした素材を丹念に拾い集め、プルーストだけでなく当時のさまざまな文学者の場合と比較し、彼らの作品を読み解いていくことで文学と教育の関係を見定めることができるだろう。本稿はそのささやかな一歩でしかない。

110 Proust (Marcel).- *Écrits de jeunesse, 1887-1895*.- ILLIERS-COMBRAY : Institut Marcel Proust international, 1991, p. 167. リュドヴィクはダニエルの父で劇作家。

リセ・コンドルセの教師たち

付表 1bis : コンドルセ校教員 (レトリック級担当 1881-1889)

ENS : 高等師範学校 (数字は合格年)、AgL : 文学アグレジエ、LH : レジヨン・ドヌール勲章 (Ch : シュヴァリエ章 : Off : オフィシエ章)

年		姓, 名	生年 月日	没年 月日	生地	県	格	父の職	ENS	Ag	LH
1	1	Talbot, Eugène	1814.8.17	1894.9.20	Chartres	Eure-et-Loir	28 1	xxx	non	1845	Off
1	2	Réaume, Pierre Eugène	1826.1.14	xxxx	Paris		75 1	sellier	1846	1849	Ch
1	3	Gaucher, Maxime Abel	1829.1.23	1888.7.25	Mory (Mitry-Mory)	Seine-et-Marne	77 4	propriétaire, anc. employé au ministère de finances	1849	1855	Ch
1	4	Dupré, Louis Ernest	1829.2.13	1896.5.7	Cerisiers	Yonne	89 3*	chirurgien	1849	1855	Off
1	5	Cucheval, Victor Louis Philippe	1830.9.4	1912.4.5	Rennes	Ille-et-Vilaine	35 1	directeur d'une compagnie de messagerie	1850	1856	Ch
1	6	Aderer, Jean Baptiste Adolphe	1832.7.7	1886.7.2	Sedan	Ardennes	08 2	commis-voyageur (fils d'un fabricant de draps)	1851	1857	Ch
1	7	Terrier, Léon Adrien	1838.5.15	1917	Rosoy (Sens)	Yonne	89 4	laboureur	1857	1860	Ch
1	8	Bernage, Siméon Auguste Barthélemy	1839.1.18	1902.8.24	Draguignan	Var	83 2	professeur de collège	1857	1860	Ch

付表 2：カリキュラム指定著作家とコンドルセ校教師の教科書版（1874, 1880, 1885, 1890 各カリの配当学年（1 はレトリック級、2 は第 2 年級、以下同様）。出版社略号 Be: Belin, Dg: Delagrave; Dn: Delalain, Dp: Dupont, Dz: Dezobry, Ga: Garnier, Ha: Hachette, LO: Lecène et Oudin）

	著作家名	作品名	指定範囲の指示	1874	1880	1885	1890	編者		出版社	刊行 年
F 01	作者不詳	ロランの歌			2						
F 02			抜粋			2	2	タルボ (+ ジョワンヴィ ル抜粋)	1-1	Dn	85
F 03	ジョワンヴィル	作品名指定なし			2						
F 04	ジョワンヴィル		抜粋			2					
F 05	モンテーニュ	エッセー	抜粋		2	2	2	タルボ レオーム	1-1 1-2	Dn Be	80 85 (81)
F 06	コルネイユ	オラス			3	3	2				
F 07	コルネイユ	シンナ			3	2	3	ロベール	2-5	Ga	80
F 08	コルネイユ	ニコメード			2	2	2				
F 09	コルネイユ	ル・シッド			2	3	3				
F 10	コルネイユ	戯曲集/傑作集			1	1	1				
F 11	ラ・フォンテーヌ	寓話詩	特定箇所 の指示 なし	1		5					
F 12			1-6 卷		2	2	2	ルグエ	4-1	Ga	83
F 13			第 7-第 12 卷		1	1	5.1	ルグエ	4-1	Ga	86
F 14	モリエール	守銭奴			2	2	2				
F 15	モリエール	女学者			2	2	2	E. ベルソン	3-5	Ga	s.d. [81]
F 16	モリエール	人間嫌い			1	1	1				
F 17	モリエール	タルテュフ			1	1	1				
F 18	バスカル	バンセ		1	1	1	1				
F 19	バスカル	プロヴァンシヤ ル	第 1、第 4、第 13 書簡			1	1				
F 20			第 1、第 4 書簡			1					
F 21	セヴィニエ夫人	書簡撰			4	4		ファゲ	2-7	LO	86
F 22	ボシュエ	世界史序説	第 3 部	2	3	3	4	E. ベルソン	3-5	Ga	86
F 23	ボシュエ	説教集			1	2	1				
F 24	ボシュエ	追悼演説		1	2	1	1				
F 25			アンリエット・ ダングルテール				2				
F 26	ボワロー	作品名指定なし			4						
F 27	ボワロー	講演台		3	5	5	4				
F 28	ボワロー	諷刺詩集		3	5	3	3				
F 29	ボワロー	詩法		1	1	1	1				
F 30	ボワロー	書簡詩		2		3	3				
F 31	ラシーヌ	エステール		5	5	5	5	アンベール	5-9	Ga	78/79

リセ・コンドルセの教師たち

F	32	ラシース	アタリー		4	4	4	4	アンベール	5-9	Ga	81
F	33	ラシース	訴訟狂			3	3	3				
F	34	ラシース	アンドロマック			3	2	2				
F	35	ラシース	ブリタニキウス				2	2	アドレー	1-6	Be	80
									E. ベルソン	3-5	Ga	
F	36	ラシース	イフィジエニー			2	3	3	アンベール	5-9	Ga	82
F	37	ラシース	戯曲集			1	1	1				
F	38	ラ・ブリュイエール	カラクテル		2,1	2,1	2,1	1				
F	39		精神の労作の章を除く					2				
F	40	マシヨン	小四句節		2							
F	41	フェヌロン	死者の対話		5		3	4	ジラル	P	Dn	53
									ルグエ	4-1	Ga	83
F	42	フェヌロン	テレマックの冒険		4	5	5	5	ルグエ	4-1	Ga	81
									ベルナージュ	1-8		81
F	43	フェヌロン	アカデミー・フランセーズへの手紙		1	1	1	1				
F	44	フェヌロン	公現節説教		1							
F	45	モンテスキュー	ローマ人盛衰原因論		3	3	4	3	E. ベルソン	3-5	Ga	
F	46	ヴォルテール	カルル 12 世の歴史		3	4		4				
F	47	ヴォルテール	書簡集抄			1	2		ブリュネル	3-6	Ha	85
F	48	ヴォルテール	ルイ 14 世の世紀		1	1	1	1				
F	49	ヴォルテール	散文撰					1	ブリュネル	3-6		
F	50	J.J. ルソー	撰文集					2	ブリュネル	3-6		
F	51	ビュフォン	撰文集		1	5	5	1	アンベール	5-9	Ga	82
									ビカール	3-10	Ga	-94
F	52	ビュフォン	文体論		1	1	1					
F	53	[コルネイユ、ラシース、モリエール、ヴォルテール]	古典劇		2,1							
F	54		中世歴史家抜粋					2				
F	55		撰文集:古典作家		5,4,3,2	5,4	5,4	5,4				
F	56		撰文集:16世紀		1				タルボ	1-1	Dn	74-75
									レオーム	1-2	Be	76
F	57		撰文集:散文・韻文 (18世紀・19世紀)			1						
F	58		撰文集:散文・韻文 (17-19世紀)				1					

F	59		撰文集・散文・韻文 (16-19 世紀)			3.2	3.2	3.2.1					
F	60		書簡撰 (17 世紀)					3					
F	61		書簡撰 (18 世紀)					2					
L	01	ブラウトゥス	抜粋			1							
L	02	ブラウトゥス	黄金の壺		1				ゴシエ	1-3	Dg	75	
L	03	テレンティウス	兄弟		3	1	1	3					
L	04	テレンティウス	アンドロス島の女		3								
L	05	ルクレーティウス	事物の本性について	抜粋	1	1	1	1					
L	06	ウェルギリウス	作品名指定なし		1			1					
L	07	ウェルギリウス	牧歌		3	3	4						
L	08	ウェルギリウス	農耕詩	抜粋	3	3	3	3					
L	09	ウェルギリウス	アエネーイス	第 1 歌-第 2 歌	4	4	4	4					
L	10			第 3 歌-第 4 歌	3								
L	11			第 3 歌-第 5 歌		3	3						
L	12			第 3 歌-第 7 歌				3					
L	13			第 6 歌-第 8 歌	2	2	2						
L	14			第 8 歌-第 12 歌				2					
L	15			第 9 歌-第 12 歌		1	1						
L	17	ホラーティウス	作品名指定なし		1								
L	18	ホラーティウス	頌歌(カルミナ)		2	2	2	2					
L	19	ホラーティウス	諷刺詩				1	1					
L	20	ホラーティウス	書簡詩			1	1	1	アルベール (詩法)	3-7	Ha	86	
L	21	オウィディウス	変身物語	抜粋	5,4	4		4	ルグエ	4-1	Be	76	
L	22			第 1 歌-第 7 歌			5						
L	23			第 8 歌-第 15 歌			4						
L	24	ブリニウス (小)	書簡撰			1	3	3	ロベール	2-5	Dp	83	
L	25	ネボース	偉人伝		5	5	5	4	モンジノ	3-2	Ha	68	
L	26	キケロー	スキビオーの夢		2	2			ジラル	P	Dz	53	
				キュシュヴァール						1-5	Ha	82	
L	27	キケロー	詩人アルキアース弁護		3	3		3					
L	28	キケロー	彫像について (ウェッレース 弾劾第 4 演説)		3								
L	29	キケロー	刑罰について (ウェッレース 弾劾第 5 演説)		3	3	3						
L	30	キケロー	老年について		2	3	3	3					

リセ・コンドルセの教師たち

L	31	キケロー	カティリーナ弾劾		2	2	2	2	ジラール	P	Dz	53
L	32	キケロー	友情について		2		2	2	ジラール	P	Dz	55
L	33	キケロー	主要な演説		1							
L	34	キケロー	ミロー弁護			1	1	1				
L	35	キケロー	ムーレーナ弁護				1	1				
L	36	キケロー	ピリッピカ第2演説			1						
L	37	キケロー	書簡撰			1	1	1	キュシュヴァル	1-5	Ha	81
L	38	キケロー	親近書簡撰		4							
L	39	キケロー	主要なレトリック理論書		1				キュシュヴァル	1-5	Ha	75
L	40	カエサル	ガッリア戦記		4	4	4	4	ルグエ	4-1	Ga	74
L	41	サルルスティウス	作品名指定なし		3	3	3	3				
L	42	リーウィウス	ローマ建国以来の歴史	第21書-第22書		3	3		ジラール	P	Dg	82
L	43			第23書-第25書		2	2	2	ジラール	P	Dg	93
L	44			第26書-第30書		1	1	1				
L	45	リーウィウス	ナラシオネス					3				
L	46	バエドルス	寓話集	抜粋		5	5	5				
L	47	タキトゥス	作品名指定なし		1							
L	48	タキトゥス	アグリコラの生涯		2	2	2	2				
L	49	タキトゥス	年代記					1	E.ベルソン	3-5	Be	83
L	50			第1書-第3書		2	2		E.ベルソン	3-5	Be	85
L	51			第13書-第15書			1		E.ベルソン	3-5	Be	85
L	52			第14書-第15書		1						
L	53	タキトゥス	同時代史					1	E.ベルソン	3-5	Be	80
L	54			第1書・第3書			1		ゲルゼール	5-13	Ha	86
L	55	ユスティヌス			5							
L	56	クゥイントゥス・クルティウス	アレクサンドロス大王伝		4	4	4	4				
L	57		ラテン教父撰文集		2							
L	58	ロモン	デ・ヴィリス					5				
L	59	ウゼ	セレクトエ		5	5	5					
L	60			リライト版				5				
L	61		ナラシオネス		2							
L	62		コンシオネス		1				ジラール	P	Dz	56
G	01	ホメーロス	作品名指定なし		1							
G	02	ホメーロス	オデュッセイア	特定箇所 の指定なし	2.1*							
G	03			第1歌、第2歌、第6歌、第11歌、第12歌		2				タルボ	1-1	Dn

G	04			第 1 歌、第 2 歌			3	3	タルボ (+VI, XI, XXII, XXIII)	1-1	Dn	87
G	05			第 6 歌、第 11 歌、第 22 歌、第 23 歌			2	2				
G	06	ホメーロス	イーリアス	特定箇所の指定なし	3,1*				タルボ ルグエ (X)	1-1 4-1	Dn Ga	79 79
G	07			第 1 歌				3				
G	08			第 1 歌、第 2 歌、第 18 歌、第 22 歌		1						
G	09			第 1 歌、第 6 歌、第 18 歌、第 22 歌、第 24 歌			1					
G	10			第 6 歌、第 18 歌、第 22 歌、第 24 歌				1				
G	11	アイスキュロス	抜粋集			1						
G	12	ソポクレス	作品名指定なし		1,1*				アンペール (Philoc.)	5-9	Ga	75
G	13	ソポクレス	オイディプース王			1	1	1				
G	14	ソポクレス	コロノスのオイディプース			1	1	1				
G	15	ソポクレス	アンティゴネー			1	1	1				
G	16	エウリーピデース	作品名指定なし		2							
G	17	エウリーピデース	アウリスのイーピゲネイア		1*	2	2					
G	18	エウリーピデース	アルケースティス			2	2					
G	19	エウリーピデース	ヘカペー			2						
G	20	アリストパネス	抜粋集		1,1*	1	1		アンペール (Plut.)	5-9	Ga	75
G	21	ヘーロドトス	歴史	抜粋	4,3	3,2	3	3	タルボ	1-1	Dn	
G	22	トゥーキューデース	ペロポネネーソス戦史	抜粋		1			ルグエ タルボ	4-1 1-1	Ha Dn	75 87
G	23	プラトーン	撰文集		2							
G	24	プラトーン	ソークラテースの弁明		2	1	2	2	タルボ アンペール	1-1 5-9	Ha Ga	53 (77) 79
G	25	プラトーン	クリトーン		2,1*	1	1	1				
G	26	プラトーン	バイドーン		1,1*		1	1				
G	27	クセノポン	作品名指定なし		4				モンジノ (MC)	3-2	Ga	76-78
G	29	クセノポン	ソークラテースの思い出			1			アンペール	5-9		
G	30			抜粋			3		モンジノ (I)	3-2	Ga	75

リセ・コンドルセの教師たち

G	31	クセノボーン	アナバシス			3		3	モンジノ	3-2	Ga	75
G	32	クセノボーン	家政術		1*	2	2		モンジノ	3-2	Ga	75
									アンペール (I-XI)	5-9	Ga	79
G	33	クセノボーン	キュロス王の 教育		5	2						
G	34			抜粋 (アナバシ スからも)			4					
G	35			I.3. VI.4.VII.3				4				
G	36	アリストテレース	詩学		1*							
G	37			抜粋	1							
G	38	ディオニュシオス (ハリカルナッ ソスの)	アンマイオス宛 第1書簡		1*				ベルナージュ	1-8	Dn	78
G	39	イソクラテース	民族祭典演説		3				タルボ	1-1	Dn	64
G	40	デーモステネース	ピリッピカ	特定なし	2,1	1			タルボ	1-1	Dn	79
G	41			ピリッポス弾劾 4編	1*				アンペール (I)	5-9	Ga	78
G	42			オリュントス情 勢3編	2,1*				アンペール	5-9	Ga	
G	43			7編			1	1				
G	44	デーモステネース	冠について		1,1*	1	1	1				
G	45	ブルータルコス	対比列伝	から1つ	4				タルボ(4 vol.)	1-1	Ha	68-69
G	46			デーモステネース 伝	1*	2	2		ベルナージュ	1-8	Dn	79
G	47			キケロー伝	1*	2	2		タルボ	1-1	Ha	52
G	48			アレクサンドロ ス伝		2						
G	49			カエサル伝				2				
G	50			ペリクレス伝				2	ベルナージュ	1-8	Dn	90
G	51	ブルータルコス	倫理論集	抜粋	3							
G	52	ルーキアノス	おもな対話ある いは論集		3				タルボ (MC)	1-1	Ha	72
G	53	ルーキアノス	死者の対話		5	3			ギユス	PC-2	Ga	74
G	54			抜粋			4	4				
G	55	ルーキアノス	夢					3				
G	56	ルーキアノス	鶏					3				
G	57	アイリアノス	抜粋		5				アンペール	5-9	Ga	75
G	58	バブリオス	寓話集					4				
G	59			撰文集:平易な 原文		4						
G	60			詞華集		4	4	4				
G	61			平易な詞華集			5	5				
G	62			ルカによる福音 書	4				タルボ	1-1		
G	63			ギリシア教父説 教集	3				タルボ	1-1	Dn	80